

かきね物語

馬琴著

三

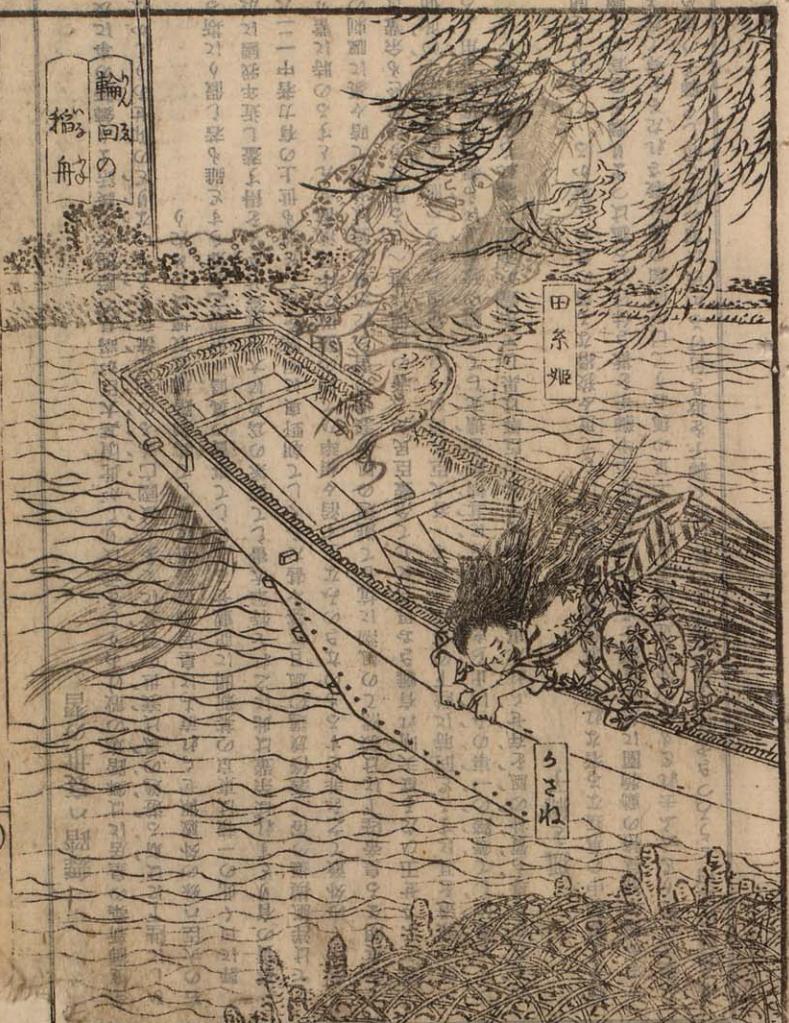
三四六

新累解脫物語卷之三

うれとく。まことに、次の日又累をやめ、草野小のんとまとら小田
の本懲をやめ、金とつをさも、かるども賺して、親子終はれ。黄昏に
十五歳の小兒ノ資料中、まよひが如シ。曾も日本人ノ健康状態セサルハ余甚
細川を渡りて、ゆき小累が極れまども、位工手下のど。子を出で。まへてハ
腰あき、録をこなす。彼此代え、一平半卵、決。古代ノ事、ナカヨリモ一
七十九、○脂肪三五、○及ヒ合水炭素二〇、チ離取、職業ノ成立セル以上、人體ニ之ニ従事シ勞力セ
後、身も心も弱く、身の構を堅く。の川を渡る。もの次の風景
二か六九〇、革番日二、一〇、脂、二〇、○イ合
ケル蛋白量、ハ猪、同氏、道セ、小兒ノ蛋白質、等シ
ベキ也。高方小罵り。終小心憚る氣をあくと、日少、彼处へ到り、いかく
これを體、小積て、ごく、驚き、驚き、岸へ渡り、と、小頃、シテ而モ
白毛、少、余カ東京ニ滞、取ルニ拘、ハラズ、細大ノ網、シテ、其職業、
その年、ト、利の季、小及ヒ、小手、開つ、ハ累も、小ちの、稻穂、残、あく、刈、う。
セシ日、日、人、其職業、就、クヤ、出、健、ア、日本、其職業、
九月廿二日、月圓日也。傍、夕飯も又、やけ。累ハ袖、小、あり。天、水、水

新羅解脫物語卷之三

や天ともありませぬ。月と影ととすがめ。父をえりてくらひをうつ。日暮にあつて年
 墓田川を渡。酔女を川へ投入して金を奪ひ去る。夜は今宵小ひと
 上絶は小あひとどりか。手を洗つた小怪。顔うち根もく。どう酔もく。あま
 怯然として答へ所を失ふ。川究々急ひれば船のきよらく小さむと。とくとくと
 向ひの岸小著。刈稻を塗ふあげられども。累がりひとく。物のあくろいと
 そ。家まじり運び入さんとわざと。さか兜をひきとて立つ。又餐食をす。あご
 ち得て父の母の下をだされし。レテ甚餘られ。現今。身を
 まる。小累の肴の稼ふらぬ。疲労す。卧ての倦熟睡。さそぎ見る。ひら燈
 火ふら。對ひく。づぶととてひる。背玉芝。小くら我心ひかる。ひく過る。朱鷺
 び這奴。小謀られ。恨もきた。他一女を殺し。その金を副収集。うつ。才を立て
 とあらう。是皆年のうつむかひと過る。ひく。悪報をく。環をまつ。の



新編解脫物語卷之二

夜累よづきが火傷やけど。彼かれが面影おもてかげのおもてかげ殺さつす。小肖こあくと。怪あやと。思おもひつ。

近曾組川少ひのくホク累シテアリ。全く彼が名ト如ク結局出

おれの中學時代のスケッチで、當時の日本はまだ、その夜のうちに電車に往かれてゐる。それで明るさを失ふ事なく、船の間から、その夜の中へ運電した。往かれてゐる。それで明るさを失ふ事なく、船の間から、その夜の中へ運電した。往かれてゐる。

只詠のを應じて、うらやまの空影が、おとこ道隣の人の景迹をうそでうちも置ぐ

を清三郎の御人を集合。日未をもつて、小つてはくへこと、とくへり。秋
彼作の奴やう。猛小亡命ちつてんと聞の小裏人より、告脩に彼人と親く
も交參の縁故をもつて。身の貪き小せんまだらで子を垂影を
論す根據トシ之ニ余、秋ミシセラム吉官乞
隠レモ、もほ。寔小人のほ沈ミ定まリのれ。近曾身上モ
ノ之諦セ。其始ニ質地醫學ニ輸入セラル、ノ日數多ノ
吾人通學及本學ノ歷史ヲ。小行者御と御近見れ。
究スルニ其始ニ質地醫學ニ輸入セラル、ノ日數多ノ
有リ和名ナ。る事は、トモ、櫻草ニ居ス他。
累ハ既ハ十二歳。年よし。小聲を招く織越の家
相續や監禁をあわせ給ふ。と異議。或うなり。さくわれ其小稀ア。醜モア。而
亦至リ是ニ於テ平再ヒ世人ノ嫌忌モ意起シ亦之ヲ禱ミ
縁モセツク人間也。ある事とも左をあわせとありて却くに之累を
憐ヒテ之ヲ參照ス可然。清三郎夫婦もうち信ア小調タ。往小男の廣ら。ある
家小只ひとう住む。小饑も冰もどど。そがくも生て世を渡ぬ。是どう

新羅解脫物語卷之三

E

先武藏四石濱より西入權之丞名小謀謀焉田糸船をうらへとく

過と新と且く引籠とあくがなぐ。此人の疑ひを避んか。一封の願書を
写く。惟翁の上獻つし。田糸姫のゆあまうふ。ばつうを今より身の暇をあつて
此のあん限り往方と索ひ。一。ひよ多許をとめりと願ひえり。

と惟清原某との疏をあらわす。町噂小手れを論り。田糸がめぐらしくある。瓦。重量。比ス。日本食料島の炭炭量。少子。知。年。信。此。陰陽師の勘文。存命ひとよどり。あくまで世が索られども。今。小玉。信。此。陰陽師の勘文。会。有。シ。又。合水炭素ノ過剰ナキチ觀ル。以上。只後世の追薦。肝要されと仰。龍遇。小異。うそ。れ。權。正。俗。か。然。生平。小人。小對。田糸姫。妻。原生君の女。既。小。そ。

貢財
おひとあくふ小朝放さず逐電もことども存亡ひづて定うるをまほよより
成吉思汗
かれ誓ふ後妻と娶ひとおりふ人の家小姓らのあとと聞を治ふ便よ

らど。玉芝へ日本田糸姫小はす。ひあへれるのきよ。彼を傷室とす。新狀

のう紙。主らとてべ。あらが迹る女妻のひも様。ふくらむよ。理あり。け
いじひつらへ。遂に玉芝を傷室とす。惟寵あつて。とめど。權へ

信ある。りのくことどひ。恨う。取用もう。うすく一萬く。年の終。小庵。嘉門病

を。自らの子孫。かくとも。死を。小庵を。うなづ。權へ。産

え。自らの子孫。かくとも。死を。小庵を。うなづ。權へ。産

新羅解脫物語卷之三

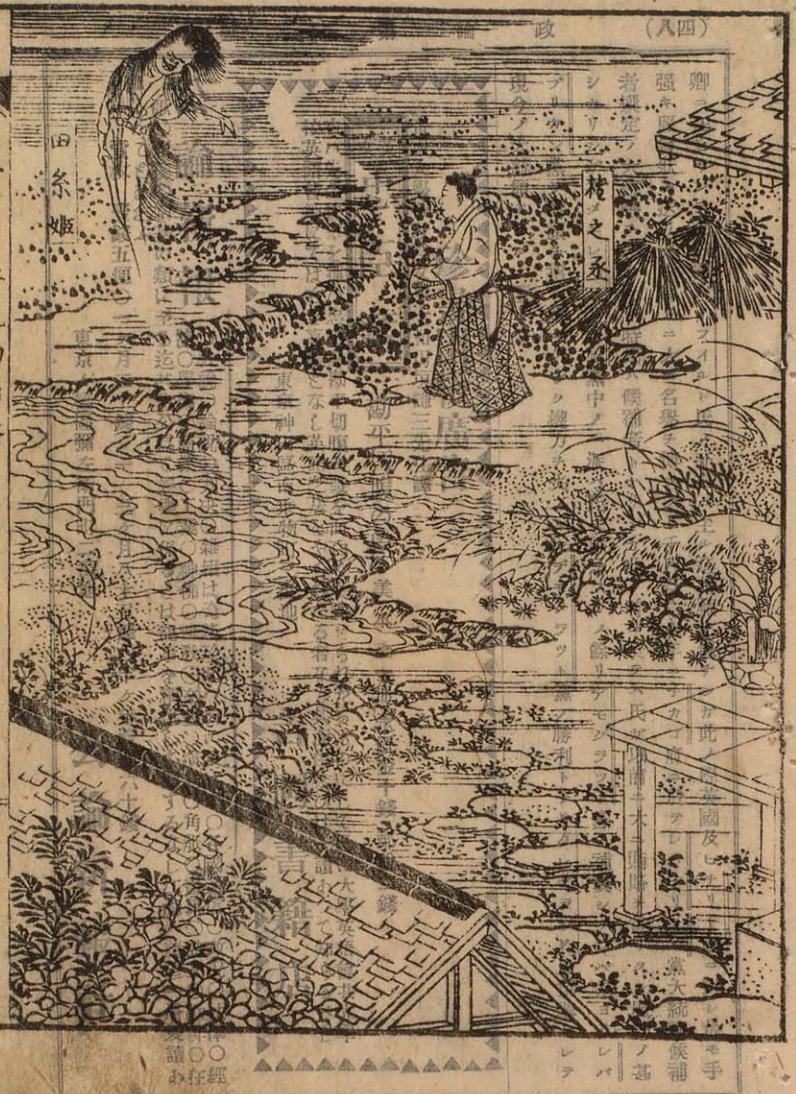
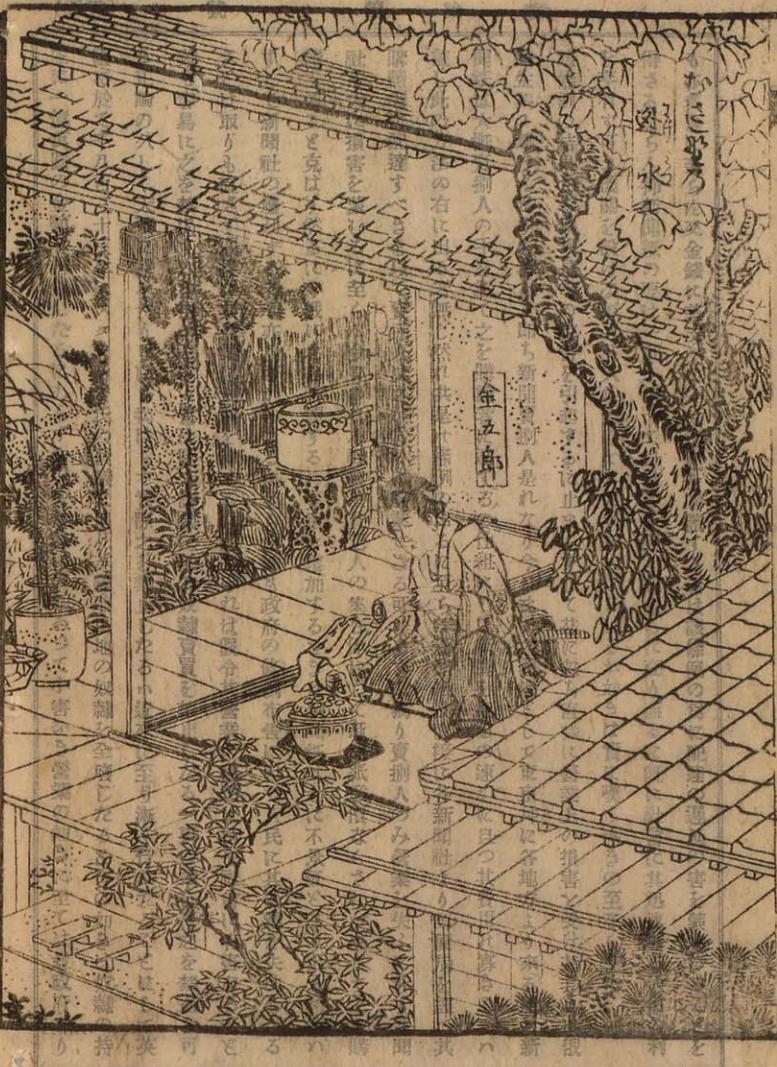
○六

小岩の秋。葉平の童。無告直實。小鎧の袖濡。小巣。高。がり。きり。せざる。夫人盛。天小勝。天定。小勝。と。りん。甲。包。舌。が。言。宣。する。權。玉芝。小。憎。む。奸。賊。され。ど。の年。未時。ち。く。意。の。隨。小世。を。狩。れ。ば。志。む。の。も。その。威。勢。の。拉。だ。が。小。黙。止。く。是。業。と。み。り。の。う。く。る。小。惡。業。ア。報。ふ。び。て。時。と。あ。り。ん。頃。六月。十六日。是。者。の。風。小。拂。か。古。家の。柳。月。小。里。む。牛。嶋。の。森。鳥。鶴。の。樹。を。三。西。し。く。曲。日。公。の。赤。壁。も。名。ひ。知。れ。蠻。火。の。塊。の。里。の。ご。肉。乞。も。賴。政。が。免。道。の。川。水。小。似。と。人。と。少。

うふ悲しき。夫漢陳の人小ゆづれば明殊と尼倫の蜂小料とめどに正
の民小ゆづれば夜光を重崖の裏小識とめど。臣原罪あり小ゆづ玉抱と
遂小罪め。况先生の果敢うなづ。萬鈞死りく。廢肉索小繫が如。一朝辭
き。身を離れり。足を踏み。心を失ひ。自一八三七年一七五一年三七
断ろ小及。これを苗んとすれども苗らば願ひ空門小入。先君亡妻の苦
提を修。皇文ガオル。今生の因縁小答。身後の報を念むべ。経小の山や。慈恩
提はしむる年齢となられたり。此頃アムステルダムの新聞に載る所の教育に關する説話に據れば老王は常
入無等報因心者。君幸ひに怪めかとぞ。されば後死金立高ひす。乳娘の女手へ
きりて常に洋琴及び馬術を教へ玉へり而して讀書習字算術及び語學の端科は之を管教。人オ科し皇女を見て之
君の恩澤小重うざれば。伊とうととゆ。偏小憐愍の制度を希望すと書
うる。その言語。非を掩言を巧む。義理ひ明め多く氣敵を嘗め少く衰れ。小立高
く。正亂八年來の疑念忽地小散。金立高と憐え父の祿相違り
小稀うべに少年より。正亂忽地男色の泥も寵愛殊小立高。抑

新羅解脱物語卷之三

○十



新田系解説物語卷之三

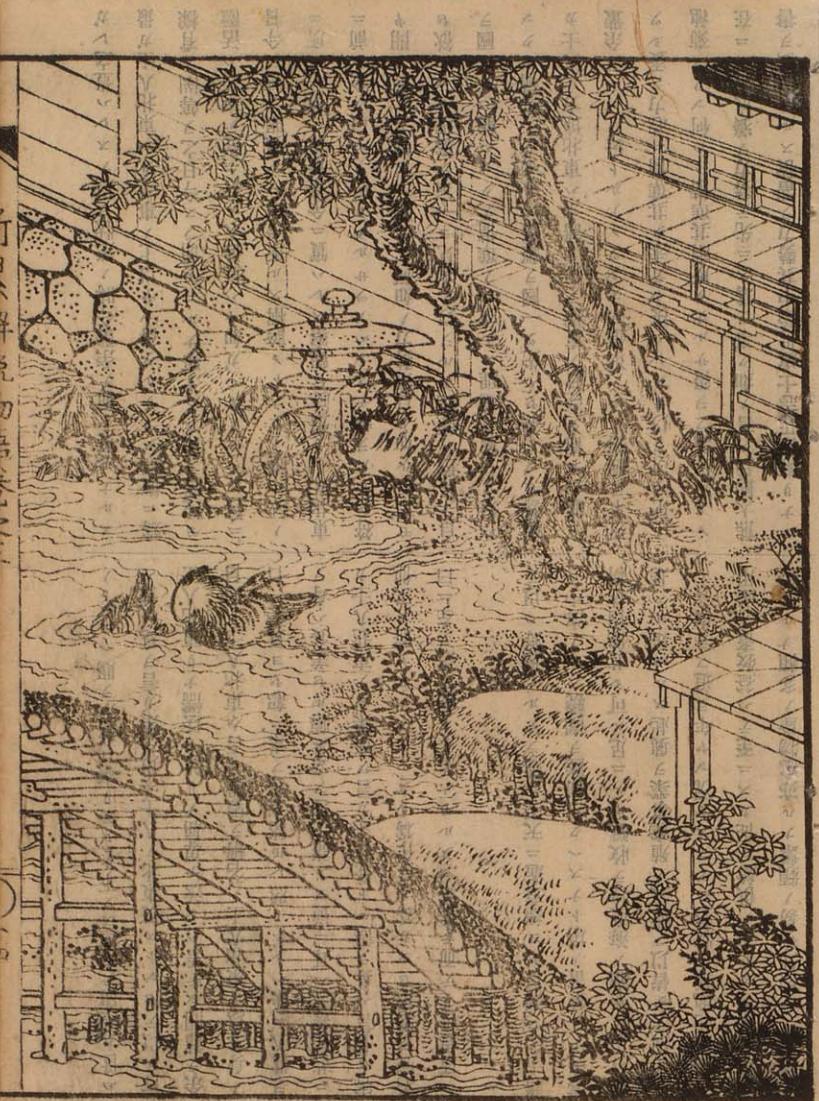
正流小愛妻あり。是へて總國岡田郡は因まの村長清三郎が女児小名を
茅績ととうと以て千葉ちばの桓武カノウの夷亂いりんをせし後ごの總人トツジンが往時むかひ兼正けんじやう一
年正月十九日平定へいじやうふる事こと御観管領ごくわんりょう成氏せいしと戰たたかひ貢市川こきめいの城じゆより攻落こうらくす。是處そこは大字おほじ地方ぢ一於一の區域くいきノ
武州石濱いしはまの食内くしのうち移住いしゆ。美濃みのの子守流こしうりの子ニ島正亂しままさらんが至いた瀬浦せうらヒレム
まご四代。此これを石濱いしはまの千葉ちばと稱めい。是處そこは政黨せいとうの嚴密げんびを干涉せつわ。世間近來
ノ卑劣ひりゃく氣風きふうヲ掃蕩そだ。得可くわ且よッ資力しげきニ乏なきシキ有志者ゆうしざうナシテ費用ひようハ多キ多く苦くる。然しかて得可くわシ以
うと立たてを。國民こくみん、舊因きゆいんを忘わ。而がて、志しを立たて。是處そこは政黨せいとうの擴張くわく着き其人じん。清三郎
シテと大嘆おおぞろ。而がて、至いた。何キトハ余輩われノ確信かくしんナシテ最さいテ疑ひ。サレ所ところナリ敢あテ問たず。世よニ有志家諸君ゆうしじやくきゅうハ果シ
ハ縁えん義ぎ機き。其その間ま茅ぼ、茅ぼ績ととうが年十カの春。石濱いしはまの館やかたへ奉まつらら。給車きしゃひひと
さもどさもどの行い。即そく更さら改革かはく。さもどさもどを正亂まさらん。胸むね規き。とと。安やすとと。彼かれ顔ほ
道路どうろの說せつを聽きくに政府せいふは新聞配達ひんしんはいでつをして愚者ぐしゃ郵便局ゆうびんきょくの手てを過くわせしめん。爲ために該條例がいじょうれいを改革かはくする。云へり
きの說せつあたし。其そのの意い。小名こな。也よ。櫻席さくせきを坐すわ。と。御前ごぜん。正亂まさらん二
十餘歲じゆ。小名こな。至いた。嫡室ぢやうしつを娶くわらら。と。告おほ。小西入金九郎こにしにゅうじやう扈くわ從つる。て。新恩しんおん小
濟こひ。と。頭かぶ。肩かたをひく。のう。されば。も。茅ぼ績ととうへ。昌まさ。捨すて。か。わ。く。の。れ。ど。
五五

新羅解脫物語卷之三

卷二

新田系解脱物語卷之三

一三



新編解脫物語卷之三

けを。其許のうへまゐるよな小手竹のべーといふを。印懐にはも黒い大小詰び。
まの二言が小手裏と云ふ。金五郎を喪なつて僕がま裏小の。そろ易く爲ひたま
と。唐ける芋績の氣色をつくる。孰とがす。又印懐の年三十小の。ま
と。量毫促と。海毛阿容こと。心色をも愚心者ある。小づらごれ
か。余樂う。彼金五郎をもとあひゆ。所詮ま下懐を取り。彼を犠牲に
生靈の種を育むこと。身を滅ぼす事。身を滅ぼす事。身を滅ぼす事。
物小こうじゆ。人されば万小一つも爲損。いかんかあらず。されど。その人
小傷け多。アレ後小手裏復覗み。そが身ねどまれかくま。由是よしむら
み。空課と。あじゆ。れふてまだやう。あく。曉られぬ。あと密語ハ印懐
も。法び。どいと易たま。處の處。小時ち。使ハ立體。小便ト。故に少とあれ。

遠侍より潛入候。寢處の床の間小居より十石の鎧唐櫃の裏小隠居らる。也東人土士房ひまほ方二石をかね鑑ヲ掌指シ第一ノ難新造新造相詣審小字裸とべし。とのよりふれんと信をもてり。芳績はくわく嘆賞し。寔小じえり才智の圓る人とす。と鎧唐櫃こそ究竟の懸家あれ。今霄又云下あひをとづく。印憐ひとえ沿果そゑり。はふや始れ堪がる風情する。小仏坐の裏一尺の名あい。勘の如き。外圓如菩薩内心夜叉と佛の説も宣ひゆく。その時芳績はるは處もまうど。と生ひゆうる。尋思もうち急流に小隠を生べし。と念矣。不勝喜之不覺也。國家の制限のうち。ソヨロ小隠を生む。まことに。心地の裏。告白せば。芳績はるも出迎へ。とこの日の寒い所。睡子之ニ興セントシテ却テ却テ意外ノ奇遇。ソヨロ。事拜謝セス。ハアラス然レモ。頗る。暖を遞さる。とおゆめ。とその心地を。ある。小殿はる。千葉の神社一代泰の人を。遠く。嫩見菩薩を案から。と。正胤。多く眉と鬚。千葉の神社一代泰の人を。遠く。嫩見菩薩を案から。と。正胤。多く眉と鬚。千葉の神社一代泰の人を。

新羅解脫物語卷之三

の神
ルナリ彼等ハ實ニ文明社會ノ重寶人ト云ハシノミ此
月ニ佛爾同胞ノ叫號ヲ悲ニ小早川源氏等思ヒ彼
ハ夢をえ候るづ辟きテ香林の娘見哉枕方山東あひと
う小狹あひて田の足と刑留の用を折らべ心うべと告めく覺
候りあすり小美きりれば骨も後ひゆく甚くわざとくせの身かあせん
彼處へ詣るに稱ど偏小命を稟き人を代らし君の安金を禱
さんとやかのまよを今朝すう慶美小入とあんを初めりと誠一とおせえあ
れば正胤あひて吟吟して小冥夢とよみあひて少くあらねばさかりも
限あり且示現の二かの隱語輒く解へども彼菩薩の実驗
揚焉ハ今ふもれひとれを極んりともひに禱の使へ頓小遣ひへたうと
仰る。かく近臣小あひのよと坐えまじ。真小度足とお前を仰らまう

程小山梨印惱の甲夜小人うち折を窺ひ主君の寢室小室廻行てや。唐
櫛う。甲由月を引出。是をか床の下小押隠して櫛の裏かくらんともす。
帶う太刀の後方前方かくらん自在うれし鎧とも小通ふう捨件の
櫛小身と滑りく裡う蓋を薦めひし主君の寢處入ゆ。とぐくと侍
さうる。芋積ハ印惱と輒く櫛へさんか。左右の正胤を聽小坐ト櫛
さじ。そのゆべせきどかを集合して茶竹のあく。小奥成催し。もぐく酒小坐
益を勧めざし。正胤のあたあべま珍膳喜加敷も。金五郎が食すの桃の
芳もとちつ。深初る鐘を初うは。ほう辟く。生を。芋積へりうく
入る。金五郎ハ嚮う枕方小竹うそとを迎。青南の香
焼ゆる。夜のり引被げ。うわまれ。正胤卧つ。床の間うる鎧唐櫛
ひくらとす。金五郎ハ嚮う枕方小竹うそとを迎。青南の香
も浮く。鈴の間のあく。送そまわづ。うりかくと正胤寝ぬ

新羅解脫物語卷之三

一六

をそらうりく。ころの中へあり。らしく。み芋積が妙見の出現あること。ゆぐ
足。田の足を則。曾の角を添ひて。曲う。さくらとの唐櫛の甲由月。され事禍する
甲とうり。曾の角を添ひて。曲う。さくらとの唐櫛の甲由月。され事禍する
二曉得く。曾の角を添ひて。曲う。さくらとの唐櫛の甲由月。され事禍する
されぞととく岸破と反起。長押小掛。ゆく。櫛の裏。小人の世め。うる氣息あむるれす。
きと刺もよ恐ひ。叫苦。声しき。裏より蓋。衝揚ろと正胤。すこ。鎧を
ひく。あらう。金身。血を塗れ。轉び出。のあい。これ。山木。手情。う。正胤。え。て大
小怒。ト。連戰。天罰。とひも。べーと罵。も。め。ゆきび鎧を。肉。よ。印惱が。吃
と刺。心地。小息絶。れ。その時。金五郎。つと。あくら。長。ひ。被を。巻。そえ
て。峰先の鮮血を拭ん。と。あくら。正胤。あは。怒。小掛を。もく。金五郎。を。あ
く。疾視。の悪女。因心を擔か。恩をも。豫。印惱と密會す。彼

を唐

横の裏

上肢

於て其發育他方比甚すれば少しく退歩シ

及長さも共に少く云々

子は頭の拍打

施行する

に當り偶然又下に含營モリテえがを加ふれば鮮明

す。されば色

忠勇と云ふ

君恩の功勳を志す

靈石体を試験するに極めて鋭敏なる試薬たるを賣せ

味小飽何の不足ありとく君をうももあらば

えより印帽かく小賊あるらば

示すには實に通じる試薬もとま

夢小鬼ひきを彼ノ君を城さんと謀らば

又をが首持て汝の身よす伎を帶

経過せる者より強き者なれば此點に着意して研究せん

し示され夫より色素產生黽勉の種類に就き述へられ亦

第五席宇野船君の創造に係る脊柱琴曲に使用する

第一席講師鶴村後一君は幻想曲ハラサチ

皮製「ローラー」及「トーリット」頭等

等との併用を試み其製法等

等の研究を得ると死も醒め道筋の如し終に活けたる

此者いわゆる例

金丸君

が不まいかゆる印帽既小

かれ面のう悶え

果るやあらわし縁あ

シは精神

とあり而

に特異

る時に發

病診断を爲す恰も内外科等の診断を爲

る時に發起せ

らる

瘡

治太郎君云

刺人とも云ふ

金立昂

たる氣をうく

額つけてゆけ

て

顎微鏡學

及する色法

名ローラー

現今此技術

第一席講師坪井次郎君は醫學者色法なる指標にて先づ

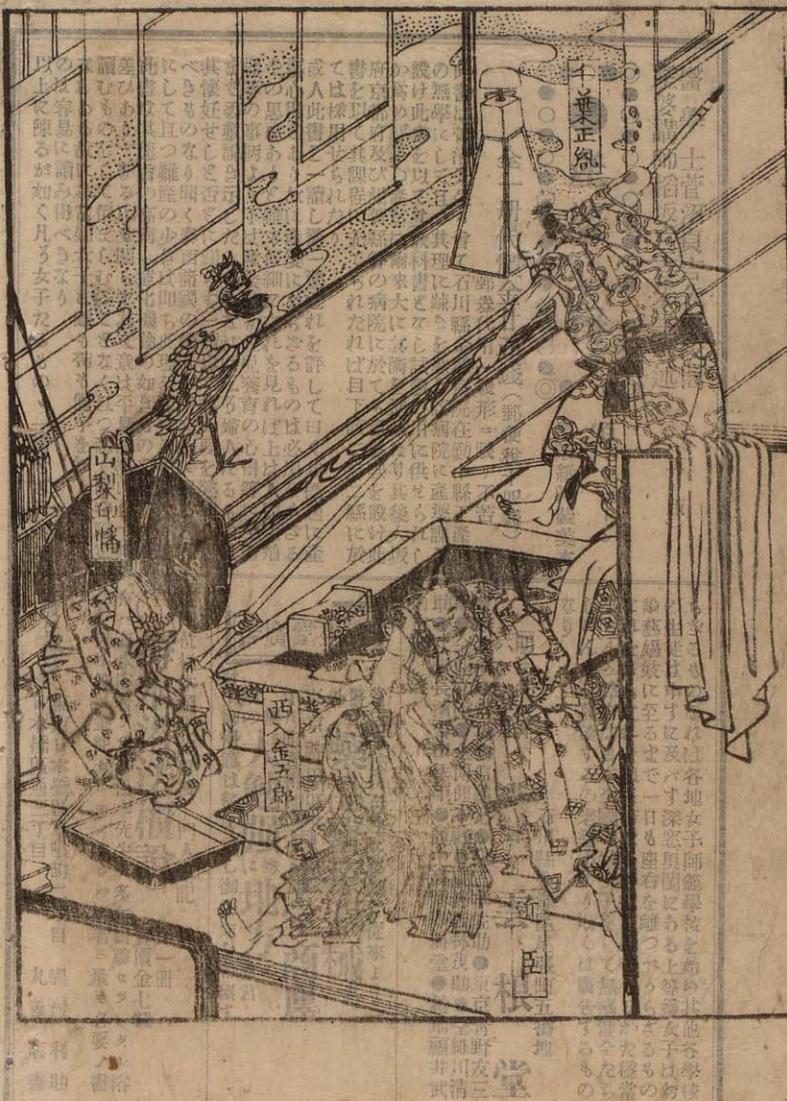
顎微鏡學

及する色法

並に使用せめて「アーティ

ミ」を論じて、微鏡

號 六 千 三 百 五 第



新編解説物語卷之三

〇八

の襟を左右へうなづき。雪の肌とあつた。言の腮らひ断る氣もあれば。正胤

つじとて忽に憂惜の情襲て、とせ小殺（よし）と小又びだされど海軍憲兵監司付士官

戸田彦坂（ひさか）モノハ兵庫縣下攝州和田岬ニ横

が。姫君の念をもとめざすやうに。どちらかとんと立候

身鶴田鹿吉、同青木忠輔○待命被免（六月二日海軍省

委員被仰付（同上）海軍大軍醫牧虎文○横須賀營

撫民官・越智要ク（えいち）明治七・宿寢の近臣（きんしん）勝太五郎（かつたごろう）明

折明治七・勝太五郎（かつたごろう）明

小燭（こく）を秉（もち）て遠持（とおせし）走

軍事委員被仰付（同上）海軍大軍醫牧虎文○横須賀營

第

折明治七・宿寢の近臣（きんしん）勝太五郎（かつたごろう）明

小燭（こく）を秉（もち）て遠持（とおせし）走

軍事委員被仰付（同上）海軍大軍醫牧虎文○横須賀營

第

廿三

おれくが身と脱んとする用意の外更ふ化り身。かくも正命の夜興

かまく茅積か印階金五郎、ぐるとすえもし妙見の出現全く這奴

お二人がゆう。信ひて解きぬとぞ仰からせし債の豫と縛と定め。金五

印階の令公隠し金五郎ハ獄屋小繫わうとぞ案小相違一毫

即ちあり。印階とも殺しの肚裏とぞありのあしせと計較する。

印階の令公隠し金五郎ハ獄屋小繫わうとぞ案小相違一毫

思慮すと人をば平信も平疑ひとぞうしく刑と行ひとぞ後金五郎を

助命の事と數回水及びりどんとぞもめふる處にり人をれを研ぶ

印階と大内一時正龍茅積がつらる。金五郎笑ひ弑蓬の事は。但

此へ主君の不徳とぞ子孫の為かず因く助がた彼か入糸を助け生涯

新羅解脱物語卷之三

物故おもひせよ。不忠の天罰とあらせば名とぞりく。順日ぞのより尋思する

少、彼ハ世小希す。美男小希今茲十六歳、すとべり。これ小少元醜婦と

妻せむ。彼いのち物外もとへざらん。あうことぞ不印階と不義と相詰めてと恥

ふ思の高麗を志はば。今殺をこも勝とくろ。憤をもともと生れり。

五、魏質に教訓を云ふと云ふ。而しては自己あはん。腰を磨ねとぞく取れり。

さてその醜女を賣ふと易う。故にふとされば彼を富家の婿とせばぞ

百も若し人の情に通じるを知らぬ。中八九度を起す。中八九度を起す。中八九度を起す。

妻醜いとぞ少ふ妻女が難くと難うじ。とぞ家食一ぱりの女貞が妻女

う。金五郎と女督とぞひまとさんりととく。茅積の正能の金五郎を

殺しにさるとぞんぞとぞ。先づしに急げうち笑ふ。」放て。犯人娘

助今晩はでて同宿せし。君の仁政へと首そくせし。かく教諭一人の死す。

被バ羽生村の農夫と危多うとりふりの女兒ふく名新羅とよらる醜女女

目次
第一回 婚嫁の儀と金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第二回 前小姓方まへくわの家いえと貪うらやまい金かなと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第三回 索縁さくねんと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第四回

第五回 索縁さくねんと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第六回

第七回 索縁さくねんと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第八回

第九回 索縁さくねんと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第十回 索縁さくねんと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第十一回

第十二回 索縁さくねんと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第十三回

第十四回 索縁さくねんと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第十五回

第十六回 索縁さくねんと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第十七回

新羅解脫物語卷之三

婿入よしりと金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第十八回

金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第十九回

金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第二十回

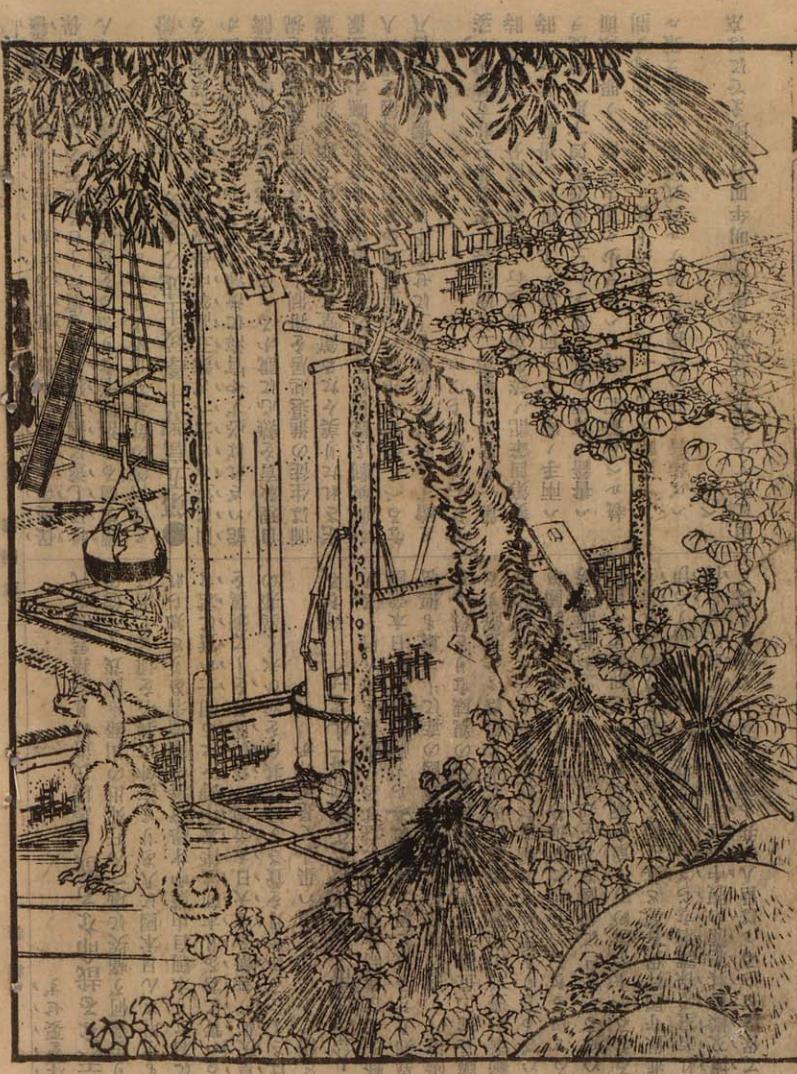
金五郎の足蹇あしづか、田中産後うぶの身みと年米婚

第二十五回

ねく。身がさとすの故あれかわいれど、彼入武家の近臣とも。農夫小より下
もろ。罪あるとりくも。況君の命小よ。女を妻ともられべ。離別せん
まう。あはれ。年未婚と徵る。その人をひそひ。小くる縁ゆゑに亦
萬事。かくわら。身もまこと。児芋積り千葉家小給事。さうか。今うとの
事。を推辞す。かく怒て。君の怒て。小あくして。ひる。罪をひく。これも亦量りにゆ
だ。其身稚じ。とり。行ぬ。かく扶助。ゆめまう。といふ憂。ひ作り。ちく家小
夫を。故き。ゆく。縁と推辞。小あく。ひく。御過せ。おぐく。ひく。魂。ひく。夫
世の胡慮。小あく。とく。ヤセ。ごかく。もと。宣ひ。されば。脱。ひ。小道。う。とも

新田水解脫物語卷之三

廿二



新田水解脫物語卷之三

廿二

新累解脱物語卷之三

かくよひ小計さうあられとふぶ。清三郎夫婦きよさんろうがゆくひとのゆゑに(讀)

回答が脇に。婚約の来るをもつて、四五日を行ひ、千葉の走卒五人。金五郎
を送り、未だその夜の皆期を見果てぬ。金五郎は、いかで累を
見し。と、お小様る美男あれへい。相會らしく。某むか。あれども彼夫婦へ
くまよちのくみ。小姓とあらば、金五郎の恩が
まくして五日朝坐間。紅茶を扶け、山椒をと。三月廿四日、長谷川、
魂を厭ひ。の信すありと故に、累へ金五郎を致ひ。齊眉。孟德耀が、
鳴鶴の間、うぐい。備三郎の形勢かからず。かく、金五郎の前妻と刺し
身退き。留ちて付佐麻連賀吉庵を松浦と。武昌太等の諸君が、始め無事。三十名、天與の幸福を厚くされた。まともな笑顔。日が前生母
公函三縁亭に於て、お送別宴を開き。お命をなくした數十名の前に周施し。要懸を失す。うれし歎を尽して
あらゆる瘦因のとく。夫婦が口を離へてもよし。右端の刈もあらぬ。め
せ。累が父と左端の名を象る。金五郎を更く。右端のとく。左端のとく。馬未
林と刈。夫婦うちの時と送り。宣定小因果の曉也。

がる。今ある二人がうちあり。抑と右出つが父權之丞が累が父と左出つが後妻玉
芝と棄ひある。又キの女懶きり。因糸娘を脇れて。あがてが絶めあら。薩摩
へ出でる。久留里の山中で死す。○日二使節一もやうる。日三使節三也。賄賂。事ありて正
さざふ他。妻を棄て奉れど。妻をと。寛ぎ。恩報。その子小保り。左右出つ。四丁積。小
田糸娘。妻を棄て。金と糸娘ひらひら。恩報。その子小保り。田糸娘が醜い。
そしのところには禍神。小結。二世の仇ともあらず。妻とより夫と。青眉。悪
業深に。猪川のふも。流小繫。して。す。癪。か終も。り。うるべた。と。おの。の巻。小
解。くるふくふくふく。